真・恋姫†無双 英傑達と二人の魔王

Minosawa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双　英傑達と二人の魔王

【Ｎコード】
Ｎ０３７１Ｘ

【作者名】
Ｍｉｎｏｓａｗａ

【あらすじ】
魔王シリーズ第２弾

心優しき魔王のミノルとその弟、『魔界騎士団』の団長アキラが倉庫で見つけた銅鏡に触れた途端、２人は姿を消した。
２人がたどり着いた場所は三國志の英傑達が女という摩訶不思議な世界にいた！
いつの間にか二人は『天の遣い』と呼ばれる存在になっていて、２

人は剣を持ち、天下をかけた戦に身を投じる。
果たして２人の運命は？
バトルあり！笑いあり！
シリアスあり！ちょっとＨな物語が今、幕を開ける！！

プロローグ（前書き）

ども…Ｍｉｎｏｓａｗａです。

ついに始めてしまった…

でも後悔はない！

ダメなストーリーかもしれませんが…よろしくお願いします。

では…開幕！！

プロローグ

さて皆さん、皆さんにとって『魔王』とは何でしょう？
ＲＰＧのボスで冷酷非情のイメージや、怪物で気持ちが悪いイメージがあると思います。

だがしかし…この物語の魔王は人間人間と同じく、時に優しく、時には厳しく、そして笑い合う、まるで人間のようなこの魔王ミノル、そしてその弟アキラ。

それでは！真・恋姫†無双　英傑達と二人の魔王　　開演です！！

ここは魔界、様々な種族達が生活している異世界。その魔界の中心にそびえ立つ城、『魔帝城』

今日もその城内にある訓練場に何百人の兵士が鍛錬している。その横で少しクセのあるショートヘアーで明るい金髪、白い鎧に似た服を着て、その腰には一本の長い剣がある。

???
「よし！今日の鍛錬は終了だ」
兵士全員
「「「「「ありがとうございました！アキラ団長」」」」」
そう…この金髪の青年こそ今作の主人公の一人、アキラである。
アキラ
「ふう…さてと…」
アキラは一息入れながら歩いていくと…アキラの前に黒髪で少し長めの髪型、黒い服を身に纏って、腰にはアキラの剣よりも少し短めだが、太さは、アキラよりも太い剣を持っていた。
???
「今、訓練終わったのか？」
アキラ
「兄さん！？何でここに？」
アキラの前にいるのが今作の主人公の一人であり、この魔界を統治している魔王で、アキラの兄ミノルである。
ミノル
「こっちも書き仕事も終わってな…お前の練習を見に来たんだけど…」
アキラ

「あちゃ～ちょうど終わったんだ…そうだ！」
アキラが何か閃いた。

アキラ
「久しぶりに歩く？時間あるし…」

ミノル
「その案乗った」

そして二人は城内を歩きながら会話をしていた。周りの者たちは二人に一礼している。

アキラ
「そういえば…第六小隊隊長のヒューマが調理係のルービィと結婚するんだって…」
ミノル
「あの二人か…どうりで目が合うと頬を赤らめるはずだ…」

雑談話を歩きながらして二人はある場所に着いた

倉庫

ここはガラクタからとんでもないお宝？が眠っている場所で、かなり広い場所である。

ミノル
「さてと…行くか？」

アキラ
「よし！行きましょう」

ミノルとアキラは塞いでいる物たちをどかして進んでいく。

すると…

アキラ
「ん？」

突然アキラがあるものを見て立ち止まった。

ミノル
「どうしたアキラ？」

アキラ
「兄さん…これって…」

アキラが手に取ったのは一枚の鏡だった。しかもかなり古い。

ミノル
「これは銅の鏡だ…何でこんなもんが」

アキラ
「誰かが置いて行ったのかな？」

二人が鏡を見て言うと突然鏡から光出した。

ミノル
「何だ！？光？」
アキラ
「眩しい…」

鏡の光がなくなると、二人の姿がなかった。

ミノル
「ん・・・」
アキラ
「うっ・・・」

二人は目を覚まし、起き上がった。

アキラ
「兄さん…ここ…」

ミノル
「ああ…俺達倉庫にいたはずだけど…」

二人が立っている場所はガラクタだらけの倉庫ではなく何もない荒野だった。

二人
「「ここ…どこ?」」

プロローグ（後書き）

荒野のど真ん中に立っている二人。

そこに…定番のあいつ等が…

そして…二人は近くにある村に向かった。

次回『介入　～現実～』

第一章　介入　～現実～（前書き）

最初は『出会いと賊殲滅編』というものです。

サブタイトルの『現実』とは二人がやって来た世界の現実という意味です。

しばらくはこれに専念します。

みなさんよろしくお願いします。

第一章　介入　～現実～

第一章　介入　～現実～

荒野のど真ん中に立っているミノルとアキラ。

ミノル
「とにかく…こんな所にいても仕方がない。とにかく歩こう」

アキラ
「そうだね…とにかく歩こう」

そう言って二人が歩き出そうとすると、

???
「おい！てめぇら！」

声がしたほうを振り向くと刃物を出している男三人がいた。当然二人は、

ミノル・アキラ
「「誰??」」

と、男三人に向かっていった。

???
「ふざけんな！てめえら二人、めずらしい格好してんな?」

ミノル
「そうか？めずらしいか？」

アキラ
「いいえ…特に何も？」

？？？
「とにかくお前らの身に付けてるものを全部よこしやがれ！」

そう言ってこの三人のリーダー的な奴が短刀を二人に向けた。

？？？2
「アニキの刃物は切れ味抜群っすよ～」

？？？3
「そうだぞ～すごいんだぞ～」

小さい男と太っている男がそう言っている。おそらく子分のようだ。

ミノル
「そんなおもちゃでか？」

アニキ
「何！？」

ミノルの一言に驚く男。もちろん弟子の二人も驚いている。だがアキラだけは呆れている。

アキラ

『また兄さんの悪い癖だよ…』

アニキ
「テメェ！ナメてんのか！？」

ミノル
「さっさと来いよ？」

アニキ
「このヤロー！ぶっ殺してやる！！」

そんなミノルの態度にキレたアニキがミノルを刺そうとするが、

ミノル
「やれやれ…」

ミノルがアニキの手首を握った。

アニキ
「イタたたっ！テメェ…」

アニキはあまりの痛さに短刀を放した。それを確認したミノルが短刀を持って、アニキを離した。

ミノル
「使い方がなってなければ、おもちゃ同然だよ」

そう言ってミノルは親指で短刀の刃を折り、アニキの前に投げ捨てた。それを見た賊三人は怯えていた。

ミノル
「今度はお前らの命を気持ちよく折ってやろうか？」

三人
「「「ヒィィィィごめんなさーい！！！」」」

笑いながらミノルがそう言うが、あまりの怖さに三人はもの凄い速さで逃げて行った。

ミノル
「何で逃げるんだ？冗談なのに…」

アキラ
「冗談に聞こえないって普通」

ミノルの言葉にアキラは呆れながら言った。

アキラ
「って言うか兄さん！さっきの奴らに近くに村があるかどうか聞かなかったの？」

ミノル
「あっ！ゴメン…」

ミノルは手を合わせてアキラに謝った。

アキラ
「はぁ～とにかく歩こう」

ミノル
「はい…」

ミノル
「あっ！村だ！」

ミノルが指差した先には村があった。

アキラ
「本当だ！！行こう」

～村～

ミノル
「これは…」

アキラ
「酷い…」

二人が見たものは村が所々ボロボロになっていて、血を出してぐったりしている人や半裸で泣いている女性、泣き叫んでいる子供がいる。

ミノル
「おい！何があった！？」

村人A
「賊の奴らが…村の物を根こそぎ持って行きやがった…関係なく村

の奴らを無関係に殺しやがって…俺の妻や、子供までも…」

村人の言葉を黙って聞く二人。

アキラ
「生き残った人達は？」

村人A
「近くの酒場にいる…」

ミノル
「わかった…ありがとう」

二人は酒場に向かった。

～村・酒場～

二人は無言で酒場に入ると生き残った村人達が落胆していた。

村人B
「旅の者か…ここに来たってなにもねえよ…」

村人C
「この村のものはみんな奴らに持っていかれたよ…」

村人達がやけくその様に二人に言った。

ミノル
「んで…そいつらは何処にいる？」

村人D
「あんたらどうするんだ！！」

ミノル
「もちろん」

アキラ
「賊退治です！」

村人E
「正気か！」

村人F

「殺されるぞ！？」

アキラ
「何もせずに殺されるよりもっとマシです！」

ミノル
「そういうこった…それじゃ…」

二人がそう言って酒場に出ようとすると、村人が慌てて酒場にやって来た。

村人G
「大変だ！賊の奴らがまたやって来やがった！」

酒場の村人全員
「「「「「何だって！！！」」」」」

村人G
「もうすぐ来るぞ！」

アキラ
「行きましょうか？兄さん」

ミノル
「そうだな…さて、いっちょ行きますか」

二人は自分の剣を持って酒場を出て、村の入り口に向かった。

第一章　介入　～現実～（後書き）

次回は二人がこの時代で初めての賊との戦闘です。

ギルティなどの技を使います。

お気に入り、感想等など大歓迎です。

『第二章　介入　～雷炎～』お楽しみに！

第二章　介入　～雷炎～（前書き）

第二章です…

いやー戦闘シーンは難しいです…

それではどうぞ…

第二章　介入　～雷炎～

ミノルとアキラは村の入り口に立っていた。

ミノル
「あの砂塵か…数は？」

アキラ
「聞いたけど…２００だって」

ミノル
「最低ノルマは５０だな」

アキラ
「相変わらずだね…兄さん」

入り口の前でのん気に話している二人。

賊一同
「「「「いやっほーーーー」」」」

賊たちは走りながら叫んでいた。

賊１
「親分！入り口に誰かいますぜ？」

賊の一人が親分という賊の長に言った。

親分
「あぁ？別にかまわねえ！やっちまえ！！」
賊一同
「「「「「おおおおーーーーー！！！」」」」」

ミノル
「来たぜ…心の準備はいいか？」

アキラ
「ああ！もちろん」
二人は武器を構えた。そして…賊に向かって走っていった。
二人
「「うおおおおおおーーーーーーー」」

先制はミノルだった。
ミノル
「おらぁ！」
賊一部
「「「「うわあぁぁぁぁ」」」」
ミノルは一振りで４、５人をぶっ飛ばした。
賊
「何だアイツは！？」
賊がミノルの行動に驚いている。
アキラ

「よそ見している暇はない！」

賊一部
「ギャアア」

その隙にアキラが賊を次々と切り倒している。

ミノル
「さすがは自慢の弟、いけてるねえ！！」

アキラ
「またオッサンみたいなこと言って！」

そう言いながら二人は次々と賊を倒している。

賊
「何だこの二人、強すぎる！」

親分
「だったら数で勝負しろ！」

半ギレ状態で手下に命令する親分。

アキラ
「数で来るね…」

ミノル
「しびれを切らしたんだろう…」

お互い背中を合わせて言う二人。

賊一部
「「「「死ねえーーーーー！！」」」」

数十人の賊の部下が二人に襲ってきた。

ミノル
「封炎…」

アキラ
「封雷…」

二人
「「解放！！」」

賊一部
「「「「ウギャアアーーーーー！！！！」」」」

ミノルの周りから紅蓮の炎が、アキラの周りに蒼い雷が賊たちを吹き飛ばした。

賊一部
「何だ？何だ？」

親分
「何だあれは！？」

ミノルの剣が赤いオーラを、アキラの剣が青いオーラを纏っていた。

ミノル
「さあ、覚悟は…」

アキラ
「おありですか？」

二人の殺気に下がる賊達、だが…

親分
「そんなのハッタリだ！やっちまえ！」

賊一部
「「「「「うおおーーーーーー」」」」」

親分の言葉に反応した奴らが、襲ってきた。

ミノル
「フン！」

賊一部
「ギャアアアアア！！」

ミノルの剣から炎が噴出し、賊たちをなぎ払った。倒れた賊たちは身体の所々焦げている。

アキラ
「遅い！！」

賊一部

「オギャアアア！！」

アキラの剣から青い雷が発生し、早い連撃で次々と賊を倒している。

気がつけばもう賊のボスしかいなかった。

ミノル

「はい、後はあんただけだ」

親分

「ぐぐぐ…貴様ら…」

アキラ

「観念しろ！」

親分

「うるせえ！これでもくらえ！！」

親分が手に持っていた棍棒で殴ってきた。だが、

ミノル

「せい！」

親分が振った棍棒をミノルは剣で軽々と止めた。

親分

「な…何だと…」

ミノル

「ぬるいな…やる気ある？」

親分
「調子に乗るなー！！」

親分は一旦ミノルから離れて、ミノルに向かって迫ってきた。

ミノル
「行くぜ…」

『シュッ』

ミノルが姿を消した。

親分
「どこにいやがる～」

ミノル
「ここだ…デカブツ」

ミノルは親分の懐にいた。

親分
「クソーーーー」

ミノル
「いちいち！」

ミノルの左の拳が親分のみぞを殴った。

親分
「グボッ！！」

ミノル
「うるせえーーーーーーーー！！」

剣を持った右手の拳で親分の顔を殴り、炎を出して吹き飛ばした。

親分は首の骨をグニャっと折れ、死んでいる。

ミノル
「はい…おしまい」

ミノルは剣を戻し、アキラも剣を戻した。

アキラ
「終わったね…」

ミノル
「いい運動になった～」

『『『『うおおおおおおおおおおおおおおおお』』』』

二人
「「何だ？？」」

二人が声がした方を振り向くと、村人達が歓喜していた。

村人
「すげー！すげーよ！あんたら」

「炎と雷が出てたぞ！！」

「賊は死んだぞー！」

「俺達は助かったんだー！！」

そう言いながら村人が二人のもとにやって来た。

村長
「遣いだ！天の遣い様だ！！」

「「「「「「「ははっ」」」」」」」

二人を前に何故か膝をついて、頭を下げている。

ミノル
「天の…遣い？」

アキラ
「どういう事でしょうか？」

村長
「ある占い師が言っていたんだ。『異界の彼方からこの戦乱に喘ぐこの世界を救う者現れる。』と」

ミノル
「異界の…」

アキラ

「彼方から…」

二人

『『それって俺「僕」達の事かーーーーーーー！！』』

二人は心の中で叫んだ。間違いなく自分達だと…

翌日

昨日村では宴をやっていた。賊らしきアジトを見つけたミノルとア

キラはそれを鎮圧、盗まれたものは村の人たちに返したのだ。
そして二人は賊が盗んだと思われる馬を連れる事にした。

村長
「遣い様…良いのですか？3日分の食料と水だけで？」

ミノル
「ああ…俺達は異界から来た者、まだこの世界の事はわからない」

アキラ
「僕達はそれを見るために、旅をしていきます。もちろん『天の遣い』は伏せてね」

村長
「何故です？」

ミノル
「俺達が『天の遣い』だと知ったら、色々な国々が俺達を自分達の物にするため動き出す」

アキラ
「そしたら…僕達がここに来た意味がなくなってしまうからです」

そう言ってミノルとアキラは馬に乗って、走っていった。

ミノル
「さようならー」

アキラ
「お元気でー」

二人は馬を操り、荒野を駆ける。彼らが向かうのは一体…

第二章　介入　～雷炎～（後書き）

二人の存在が、国々を巡った。

次回　第三章　介入　～轟く名～

お楽しみに！！

第三章　介入　～轟く名～（前書き）

第三章完成～

世紀末雑魚さんの作品、　クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶ　アッパレ恋姫大決戦！！～慶次もいるよ！～の内容を少し拝借しました。

それでは…どうぞ！

第三章　介入　～轟く名～

ミノルとアキラが賊達を一網打尽し、村から旅立った。

それから二人は、旅の道中に賊には何度も遭遇するが、二人はそれを撃退している。

そして二人の名は大陸中に響き渡った。

～劉備ｓｉｄｅ～

兵
「以上が送られてきた書になります」

とある城の一部屋にて……

この部屋では劉備（桃香）、関羽（愛紗）、張飛（鈴々）、諸葛亮（朱里）、鳳統（雛里）、趙雲（星）が会議を行っていた。

公孫賛（白蓮）の下から桃香は独立して自らの理想“戦のない平和の世”の為、仲間と共に剣を振るう日々が続いていた。

そんなある日、袁紹（麗羽）から桃香宛てに尺牘が届いた。

その内容は簡単に説明すると“董卓（月）が悪い事をして洛陽の民が苦しんでいる。だからみんなでやっつけましょう”というものだ。

星
「どうされるかな、桃香殿」

桃香
「勿論参加するよ！　みんなを助けなきゃ！」

愛紗
「確かに洛陽の民を助けるのが我らの務めです」

鈴々
「みんなを助けるのだぁー！」

星が質問すると、桃香はすぐさま参加の意を唱えた。

そして兄弟の盃を交わした愛紗、鈴々も桃香に賛成した。

しかし……

朱里
「……私は反対です」

雛里
「私もです」

星
「朱里と雛里に同じく」

朱里、雛里、星がそれを反対した。

愛紗
「何故だ！　民が苦しんでいるんだぞ！」

朱里
「そこです、愛紗さん」

鈴々
「そこって……どういう事なのだ？」

朱里
「考えてみてください。民が苦しんでいるならば我々の耳にも届く筈です」

雛里
「しかし、そのような情報や噂は一切耳にしておりません」

星
「私も一度洛陽に足を運んだがそのような街には見えなかった」

朱里
「それなのにこの尺牘には民が苦しんでいる……はっきり言って信憑性がありません」

愛紗
「つまりは……」

桃香
「この袁紹さんの嘘って事？」

朱里
「はい……」

朱里らの言い分に冷静になる桃香。
愛紗もまた冷静になる。
鈴々は既に頭から煙が出ている。

朱里
「ですが決めるのは私達ではなく桃香様でしゅ……はわわ／／／
噛んじゃった／／／」

雛里
「あわわ……」

肝心なところで噛む朱里。

桃香
「……」

桃香は朱里の言葉を聞き、思い悩む。

そして出した答えは……

桃香
「……確かにこの尺牘は嘘かもしれない。だけどもしかしたら本当の事かもしれない。私はこれが本当かどうか自分の目で確かめたいの。だからこれには参加します」

参加であった。

愛紗
「わかりました。至急、隊の準備を致します」

鈴々
「にゃ？　終わったのか？」

星
「ふっ……では私も準備をするとしよう」

雛里
「あわわ……準備をしなきゃ」

朱里
「雛里ちゃん、兵糧の数は大丈夫かな？」

桃香の参加の言葉で各々の準備にとりかかろうとした。

桃香
「あ！　ちょっと待って」

しかし桃香が皆に待ったをかけた。

愛紗
「どうされました？」

桃香
「えっとね、例の件について聞きたいと思って」

愛紗
「例の件…『赤き戦人』と『白き戦人』の事ですか？」

桃香
「うん」

桃香は皆に『赤き戦人』と『白き戦人』について聞いた。

愛紗
「現在の情報だと洛陽に姿を見せているとの事……」

桃香
「そっか……なら尚更連合軍に参加しないとね」

朱里
「赤き戦人…腰にさしている剣は赤き炎を出し、白き戦人は赤き戦人の剣より長く、その剣から雷を出し数百の賊を二人で倒し、しかも賊から盗まれた品々を返しているという事で有名で街の人々から人気があります」

鈴々
「もしかしたら鈴々たちと一緒かもしれないのだ！」

桃香
「うん！　だから……必ず会わないと。そしてその人の意志を聞かないと！」

こうして桃香達はまだ見ぬ赤き戦人と白き戦人の出会いを楽しみにしていた。

～孫策ｓｉｄｅ～

???

「私達はこの連合軍に参加するわ」

此処は孫呉の城。
城の部屋の一角にてある会議が行われていた。
その部屋には孫策（雪蓮）、孫権（蓮華）、周喩（冥琳）、黄蓋（祭）、陸遜（穏）、甘寧（思春）、周泰（明命）が話し合っている。
その内容は桃香達と一緒で連合軍に参加するか否か。
そして先ほどの発言により雪蓮達、孫呉は連合軍に参加するようだ。

冥琳
「よろしいのですか？」

雪蓮
「袁術のお嬢様が行けって言うんだから…行くしかないわよ…それに孫呉の名を轟かす機会でもあるし…」

蓮華
「姉さまの言う通りね…断ってもどの道…無理矢理にでも連れて行かせるもの…」

蓮華がため息混じりに言った。

雪蓮
「そういえば冥琳、例の…」

冥琳
「ああ…『赤き戦人』と『白き戦人』の件…今は洛陽に向かわれたみたいだ」

雪蓮
「洛陽……か」

そう言って雪蓮は考え込む。

雪蓮
「その二人…男かな？」

『『『『『ズドーーーーーーーーーン』』』』』

部屋中の座っている人たちが全員ずっコケタ。

祭
「策殿…ご冗談を…」

雪蓮
「だって～気になるじゃない！」

冥琳
「はぁ～まったく…」

雪蓮達もまた、まだ見ぬ赤き戦人と白き戦人の出会いを（ある意味？）楽しみにしていた。

？？？？？

？？？

「クソ！　何故こんな事になった！？」

此処は劉備の国でなければ孫呉の国でもない。
辺りは宇宙ともいえる漆黒に星々が照らす空間。
そこには二人の男性が話し合っていた。
先ほど叫んでいた男性の名は“左慈”

？？？

「落ち着いてください左慈」

そして左慈を落ち着かせようとしてる眼鏡の男性は“于吉”

左慈
「これが落ち着いていられるか于吉！！　北郷とやらだけではなく、意味のわからぬ二人まで外史の世界にやってきたのだぞ！」

于吉
「左慈の気持ちも充分承知しております。しかも更に悪い事が…」

左慈
「何だ！？」

于吉
「また二人…この外史の世界に来たようです」

左慈
「また二人って！どういう事だ！？」

于吉
「落ち着いてください…起こってしまった事はもう止められません」

左慈
「貴様……まさかこのまま放置しておくのか！？」

于吉
「ふっ……違います。起こってしまった事を“なかった”事にすればいい話です」

左慈
「……つまりは外史で亡き者にすればいいと？」

于吉
「そうです。単純な話です」

左慈
「ふん！いいだろう…その案に乗ったぞ」

だがこの二人は後に知ることになる…赤き戦人と白き戦人とやって来た二人の怖さを…

一方、その頃あの二人はというと…

～洛陽～

アキラ
「兄さん…」

ミノル
「ああわかってる…」

二人は洛陽にいるが…その傍らには、

???
「ワン！」

それは首に赤いバンダナをつけている犬だった。

二人
『『この犬の飼い主を探さないと…』』

二人は洛陽で犬の飼い主探しをしていた。

第三章　介入　～轟く名～（後書き）

二人は何故犬の飼い主探しをしているのか？

そして二人があの娘の名を聞いて驚愕します。

そして于吉が言っていた二人の正体が明らかに！？

次回　『介入　～驚愕～』お楽しみに～

第四章　介入　～驚愕～（前書き）

このサブタイトルの意味がわかる話です。

新キャラの正体とは？

第四章　介入　～驚愕～

どうして二人が犬と一緒にいるのかというと…

～回想～

落葉に着いた二人は馬を預け、街を歩いていた。

アキラ
「そういえば兄さん、お金とか大丈夫？」

考えてみれば二人はこの世界の通貨すら持っていない。

ミノル
「ああ…前に村を襲った賊のアジトから少し拝借を…」

アキラ
「要するに盗ったのね…」

ミノル
「うん！」

アキラ
「はぁ～」
それを聞いたアキラはため息をついた。

ミノル
「とにかく何か食うか？」

そう言ってミノルは肉まんを買って、アキラに渡した。

すると…

？？？
「ワン！」

二人は鳴き声がした方をを向くと、そこには首に赤いバンダナを巻いているコーギー？に似た犬が尻尾を振ってお座りしていた。

ミノル
「食べたいのかな？」

ミノルが犬に肉まんを見せると犬が尻尾を更に速く振った。

犬

「ワン！ワン！」

アキラ
「様子から見て間違いないね…」

ミノル
「ほら、お食べ」

ミノルがそう言って犬に肉まんをあげると、犬はもの凄い勢いで肉まんを食べている。

ミノル
「か…可愛い！」

その姿を見たミノルはうっとりしていた。

アキラ
「とにかく行こう、兄さん」

ミノル
「ああそうだな…じゃあなワンちゃん」

二人はそう言って犬に別れをするのだが、

犬
「ワン！」

犬が二人のもとにやってきて、ミノルの足元で尻尾を振ってお座りをしている。
いわゆる『一緒にいて』の意味だろう。

アキラ
「兄さん…」

ミノル
「懐いちゃった、ハハハ…」

ミノルは犬を抱っこして、アキラがある事に気づいた。

アキラ
「あれ？この犬、バンダナでわからなかったけど、首輪がついてる」

ミノル
「マジで！」

アキラが指差している所を見るとバンダナに隠れて首輪が見えた。

ミノル
「飼い主とはぐれたのか…」

アキラ
「探しましょう」

そして今に至る。

アキラ
「手がかりは赤いバンダナだけ…」

ミノル
「う～ん、とにかく探すぞ！」

アキラ
「いませんね…」
ミノル
「ああ…町中探してもいないとは…」

二人は町中探しても飼い主が未だに見つからない。

二人は今、広場で休憩している。

アキラ
「まさか野良犬とかじゃあ？」

ミノル
「それはない。そのバンダナには汚れがほとんどない。って事は飼い主が毎日取り替えている証拠。この町にいるのは間違いないはず…」

二人が考え始めていたその時だった。

犬

「！！…ワン！ワン！」

突然犬が何か感じたのか走っていった。

その先には赤い髪色をしている少女が立っていた。

？？？

「・・・・セキト！！」

犬

「ワン！」

犬は少女の胸に飛び込んで、尻尾を振っている。

？？？

「・・・・心配した」

犬

「クゥ～ン」

ミノル

「よかった…飼い主が見つかって」

アキラ

「そうですね」

すると少女が犬を抱っこして二人の前にやって来た。

？？？

「ありがとう…私は呂布…真名は…」

二人
「「え！？」」
二人は少女の名前を聞いて驚いて耳を疑った。そして二人は後ろを向いた。
呂布
「？？？？」
アキラ
「兄さん！呂布ってあの三国志の！？」
ミノル
「ああ…最強の猛将と言われるあの呂布だ。だけど男のはずだぞ！！」
アキラ
「でもあの子女の子だよ！」
ミノル
「あっ！そうか…そういう事か」
ミノルはある事に気がついた。
ミノル
「考えてみれば、三国志には天の遣いなんて存在しないはずだ…」
アキラ
「って事は…」

ミノル
「俺の勘だけど…この三国志に出てくる武将全員美少女の可能性が高い…」

アキラ
「いわゆるパラレルワールドって事？」

ミノル
「そういう事だ…俺たちはちょっと変わった三国志の世界に来たって訳だ」

二人が会話していたその時、彼女が二人の腕を掴んだ。

？？？
「会わせたい人がいる…」

二人
「「えっ！！」」

彼女の言葉に耳を疑うミノルとアキラ。

呂布
「ついて来て…」

～洛陽・王座の部屋～

二人が連れてこられたのは王座の間だった。

ミノル
「り…呂布ちゃん？誰が俺たちを…」
？？？
「私たちですよ…」
？？？2
「ご無事だったのですね…」
二人が声がした方を振り向くとそこには二人の若い男と女がやって来た。男は白髪で少し筋肉質・緑色の服を着ていて、女は茶髪でスタイルが良く、青色の服を着ている。
ミノル
「誰？」
？？？
「お忘れですか？」
アキラ
「まったく…」
？？？2
「こう言えばいいかしら？ミー様、アー様」
ミノル
「あっ！！まさか…」
アキラ

「その呼び方をするのはあの二人しかいない」

ミノル
「コーウェイ！」

アキラ
「シーナさん！」

第四章　介入　～驚愕～（後書き）

新オリキャラ、コーウェイ&シーナ参戦

二人の正体とは？

次回　介入　～経緯～

第五章　介入　～経緯～（前書き）

今回はコーウェイとシーナの正体が明らかに、

そして…片想いもあるよ。

それでは…どうぞ！

第五章　介入　～経緯～

コーウェイ＆シーナ参戦

ミノル
「な…何で？」

アキラ
「あなた方がここに？」

ミノルとアキラは驚きを隠せない。何故ならこの二人は魔界の魔帝城に仕えている大臣である。

ミノル
「何でお前らがここに？」

コーウェイ
「その前に、あなた方に会わせたい人が玉座に座っています」

アキラ
「会わせたい人？」

二人が見たのは、玉座の椅子に座っている少女がいた

その少女はまるで冷たく、悲しい目をしていた。

？？？

「は…はじめまして…私は董卓…」

二人
「「えっ！？」」

董卓の名を聞いた二人は驚いた。

ミノル
「董卓ってあの！！」

アキラ
「悪逆非道と呼ば…」

？？？
「違う！！」

アキラ
「えっ！？」

アキラの喋っている途中に、董卓と名乗る少女の隣にいる眼鏡をかけた少女がアキラに怒鳴った。

？？？
「月はそんな事する訳がない！ふざけた事を言わないで！！」

そう言って少女はアキラの前に立ち、彼の胸倉を掴んだ。

董卓
「詠ちゃん！止めて」

？？？

「でも！」

ミノル

「嬢ちゃん！落ち着いて！！」

そう言ってミノルは彼女を止めた。

ミノル

「俺の弟が無礼な事を言って申し訳がない」

そう言ってミノルは彼女に頭を下げた。

その光景を見て内心驚くアキラ・コーウェイ・シーナ。無理もない、魔界の頂点にいる男が謝罪をしているのだ。

アキラ

「兄さん…」

そしてミノルは頭を上げ、眼鏡をかけている少女を見た。

ミノル

「ついでと言って悪いが、あなたの名は？」

賈駆

「ボクは賈駆（かく）」

張遼

「うちの名は張遼！董卓軍の客将や」

華雄
「私は華雄だ…」

呂布
「……呂布(りょふ)…セキトの事ありがとう」

女性陣はそれぞれ自己紹介をした。

賈駆
「アンタ達は？」

アキラ
「僕はアキラ」

ミノル
「俺はミノル、アキラの兄だ」

二人は軽く自己紹介をした。するとコーウェイとシーナが二人の前に立った。

コーウェイ
「皆さん、ミノル様が『赤き戦人』で、」

シーナ
「アキラ様が『白き戦人』でございます」

一同
「「「「えっ！？」」」」

玉座の人間全員が驚いた。しかし、何故かミノルとアキラも驚いて

いる。

ミノル
「えっ？何その『赤き戦人』って？」

アキラ
「自分も『白き戦人』って意味が全く…」

コーウェイ
「おや、知らないのですか？」

シーナ
「もう大陸中に轟いている名でございますから」

シーナの言葉にため息をつく二人。

アキラ
「天の遣いではなく別の名で轟いているとは…」

ミノル
「予想外だった…」

賈駆
「それで、本当に炎と雷を出せるの？」

ミノル
「ああ…でも今は封印してるから…」

賈駆
「つまり戦う時にその封印を解く訳ね」

アキラ
「わかりやすく言えばそうです」

ミノルとアキラは簡単に説明した。

コーウェイ
「皆さん…もう遅いですし」

賈駆
「そうだね…解散！！」

ミノルとアキラ、そして董卓達の自己紹介はこうして終わった。

～客室～

そこにはミノルとアキラ、コーウェイとシーナがイスに座っていた。

ミノルとアキラは今までの事を二人に話した。

コーウェイ
「我々は…シーナと一緒に倉庫の整理をしていて」

シーナ
「いきなり目の前が真っ白になって、気がついたら玉座に…」

ミノル・アキラ
「「・・・・・・」」

二人はコーウェイとシーナの話を聞いているが何故かイライラしていた。

ミノル
「なあ…聞いていいか？」

コーウェイ
「何でしょう？」

ミノル

「多分…アキラと同じ事だと思うけど？」

アキラ
「うん…そうだよ…一つ言っていいかな？」

シーナ
「はい？」

そして、ミノルとアキラは二人に指を指した。

ミノル・アキラ
「「何で二人は若返ってんの！！？？」」

ミノル
「俺が知っているコーウェイは白いひげを生やした、頑固ジジイだったのに…」

アキラ
「シーナさんはそのコーウェイさんの奥さんで、苦労人のおばあさんだったのに…」

二人の言葉に苦笑いのコーウェイとシーナ。

コーウェイ
「自分…頑固でしたかな？」

シーナ
「ええ…頑固の塊でした…でもそれも含めて私はあなたを愛しています」

コーウェイ
「シーナ…今の君は本当に綺麗だ」

シーナ
「あなた…」

二人『ミノル・アキラ』
「「あんた等…」」

メロメロオーラを出している二人に、半ギレのミノルとアキラ。

二人『コーウェイ・シーナ』
「「すみません…」」

自重したコーウェイとシーナであった。

ミノル
「そう言えばお前ら、武器とかは？」

コーウェイ
「今は部屋ですが、双風剣が…」

シーナ
「私も今はここにはありませんが、小水剣が部屋に」

アキラ
「なるほど…」

どうやら二人も武器を持っているそうだ。

ミノル
「では…本題に入ろう」

辺りは一変、静かな感じになった。

コーウェイ
「今、董卓殿は民を苦しめる暴君として世間に広まっているらしい」

アキラ
「えっ！洛陽ではあんなに平和なのに？」

シーナ
「そう偽の噂だからです。そしてその暴君を倒さんとする連合軍が結成されたのこと」

ミノル
「なるほど…その偽の噂を流れたのは洛陽の外か…」

アキラ
「外？」

ミノル
「つまり、洛陽以外の国にその偽の噂などを流せば誰もが打倒董卓に旗を揚げるはずだ…自分の国の名を轟かすために」

アキラ
「そう言えば連合側の総大将は袁招でしたっけ？」

シーナ

「情報によれば、結構自分で、『袁家は名家』と自慢していると」

アキラ
「そしてその名を轟かせようとしている国は、蜀、魏、呉の三国」

ミノル
「そうだ…」

コーウェイ
「つまり…連合側に偽の噂を流した奴がいると…」

ミノル
「その可能性は大だ…」

三人
「「「・・・・・・・」」」

ミノルの言葉に無言の三人。

アキラ
「僕の提案だけど…」

アキラが挙手をした。

ミノル
「何だ？」

アキラ
「董卓軍に入る？」

三人
「「「えっ？？？」」」
アキラの言葉に疑問の三人。
アキラ
「だって！彼女は悪くないし噂だけで、しかも嘘だらけの噂のために彼女が死ぬなんて…それに…」
コーウェイ
「それに…」
アキラ
「それに…あんな悲しい目をした彼女をほっとけないし…」
アキラは赤い顔をして言った。
ミノル
『あ～あいつ…董卓ちゃんの事…』
アキラの心中を察したミノルは立ち上がった。
ミノル
「俺も賛成だ」
アキラ
「兄さん！！」
ミノル

「確かに…あんな弱々しい彼女を見捨てる訳には行かないし、それに…
弟の初恋を兄として応援しないとな？」

アキラ
「に！兄さん！？僕はそんな…」

ミノル
「違うのか？」

アキラ
「い…いや…好き…」

顔をたこのように真っ赤な顔をで視線を逸らすアキラ。

シーナ
「それじゃあ私たちも…」

コーウェイ
「参加しますか」

ミノル
「ああ！」

アキラ
「ありがとう…」

こうして四人は董卓軍に入ったのであった。

第五章　介入　～経緯～（後書き）

董卓軍に入ったミノル達。

虎牢関に連合軍が迫る！

董卓の言葉に怒鳴るアキラ。

そしてまたもや片想いもある？

次回　『介入　～準備～』お楽しみに～

第六章　介入　～準備～（前書き）

今更ですが…ＯＰとＥＤを決めました。

ＯＰ　ＡＬＬ－ＯＵＴ　ＡＴＴＡＣＫ　Ｂ'ｚ

ＥＤ　孤独のＲｕｎａｗａｙ　Ｍｉｘｔｕｒｅ　Ｓｔｙｌｅ　Ｂ'ｚ

ＡＬＬ　Ｂ'ｚです！

第六章　介入　～準備～

翌日、ミノル、アキラ、コーウェイ、シーナの四人は玉座の間にいた。

賈駆
「それじゃあ…ボク達の軍に入るんだね…」

ミノル
「ああ…そうだ」

賈駆の言葉に同意するミノル。

董卓
「ありがとうございます…私のために、こんな事に巻き込んでしまって」

そう言って彼女は四人に頭を下げた。

アキラ
「いいえ、とんでもない！僕達が決めた事ですから顔を上げてください」

賈駆
「まあ、赤い戦人と白き戦人が味方につけば心強いけど…」

ミノル
「けど？」

賈駆
「ううん！なんでもない…もうすぐ作戦会議が始まるから少し待っててて？」

ミノル
「わかった…」

そして張遼、華雄、呂布が玉座の間に集まり、作戦会議が始まった。

賈駆
「連合軍が攻めてきているのは知ってるね？」

ミノル
「ああ、知っている」

賈駆
「一度はシ水関（しすいかん）で食い止めようとしたのだけど……」

張遼
「ウチらの猪突猛進を人物化した将が突貫したんよ。そんですぐさま陣形が崩れた」

華雄
「馬鹿にされたのだ！　許せる筈がない！！」

張遼
「だから阿呆なんやで！！」

賈駆

「落ち着きなさい！　今の言う通り、連合軍は着々と近づいてきてるの。わかった？」

ミノル
「つまり…かなり劣勢って訳か」

アキラ
「華雄さん、そのシ水関を連合軍のどこの部隊が中心に攻めてきたんですか？」

華雄
「ああ…旗印は『劉』だったな」

コーウェイ
「劉備軍ですね…他は？」

華雄
「いや…『劉』の旗印だけだったな…」

シーナ
「曹操軍と孫策軍は？」

華雄
「後退していた」

アキラ
「後退した？何故」

ミノル
「どうせ兵を無駄に減らすのが嫌だったから、劉備軍だけで攻めさ

せたんだろう」

張遼
「それと虎牢関攻めと何か関係があるんか？」

ミノル
「ああ…予測だが、たぶん前衛にその劉備軍が来る可能性がある」

賈駆
「シ水関で兵を消耗させたのに？」

ミノル
「まあ大方それぞれの軍から兵の数と兵糧を揃えて行くんだろうと俺は思う」

賈駆
「なるほど…」

アキラ
「ちょっとその前に、董卓さんの意見を聞かないと…」

ミノル
「ああ…そうだな…」

アキラ
「董卓さん、君の考えを聞かせて欲しい」

董卓
「……私は降伏をしようと思っています」

賈駆
「月?！　やめて、降伏したって殺されるだけ！」

董卓
「それでも、みんなの命が助かるなら……」

賈駆
「月は悪い事してないのよ！　何でそんな事しなきゃいけないの！？」

董卓
「……詠ちゃん」

賈駆
「何でよ……何で」

董卓
「……ごめんね、詠ちゃん」

賈駆は涙目になりながら董卓を説得しようとしたが……

董卓
「私一人の為にみんなを苦しめちゃいけない。だから降伏するよ、詠ちゃん」

賈駆
「うぅ……」

呂布
「……」

華雄
「クッ……私にもっと力があれば！」

張遼
「ホンマ憎たらしいで、連合軍」

董卓は既に降伏する考えでいた。
何も出来ない配下達は悔しい気持ちや悲しい気持ちになっていた。
そこへ……

アキラ
「董卓さん…」

董卓
「はい…」

アキラが董卓の前に立ち、自分の手を董卓の肩に乗せた。

アキラ
「何で無理してるの？」

董卓
「！？　む、無理なんてしてませんよ」

アキラの言葉に董卓は少し焦る感じで言い返した。

そして…ミノルはアキラの隣に来た。

ミノル
「いいや…アキラだけじゃない。俺やコーウェイ、シーナも無理して言っているようにしか聞こえなかったよ」

ミノルは真剣な眼差しで董卓に言った。

アキラ
「お願いだ董卓、『君主』の君の答えじゃない。『君自身』の…本当の事を言ってくれ」

アキラは悲しい目をしながら董卓に言った。

アキラ
「教えてくれ…君はどうしたいの？

アキラが再び董卓に問いかける。
しばらく沈黙が続いて……

董卓
「……私は」

アキラ・ミノル
「……」

董卓
「私は……みんなと一緒にいたい……みんなと一緒に……生きたい」

涙を流しながら答えた董卓。

アキラ
「……それが君の答えかい？」

董卓
「……はい」

コーウェイ
「それで…連合軍は今どこに？」

賈駆
「まだ情報が…」

と、そこへ……

???
「失礼しますぞ？！」

帽子を被った少女が勢いよく王座の部屋に入ってきた。

賈駆
「ねね、動きは？」

???
「連合軍が見えてきたです！　もう少しで到着する筈です！」

賈駆

「……モタモタしていらんないわね」

ミノル
「俺にいい案がある」

その一言で全員の視線がミノルに移る。

???
「何を言ってやがるです！　というかお前誰ですか！？」

ミノル
「俺はミノル」

アキラ
「僕はアキラ」

ミノル
「お嬢ちゃん、お名前は？」

陳宮
「あ、ねねは陳宮（ちんきゅう）です……って何で和んでいるですか！？」

呂布
「……ねね、うるさい」

陳宮
「何ですとー？！」

陳宮は一人で騒いでいた。

賈駆
「いい案って？」

ミノル
「簡単な話だ…俺とアキラで虎牢関の前に立ち、連合軍を迎え撃つ」

賈駆
「……大丈夫なの？」

ミノル
「心配ないって！なあ？アキラ」

アキラ
「はい！」

ミノル
「呂布と華雄と張遼は基本は待機、合図を出したら一気に攻めろ」

呂布
「・・・・・うん」

華雄
「わかった」

張遼
「その案乗ったで！」

ミノル

「コーウェイとシーナは彼女（董卓）の護衛だ」

コーウェイ
「わかりました」

シーナ
「全力でお守りいたします」

ミノル
「行くか！」

アキラ
「はい！」

董卓
「アキラさん！」

二人が部屋から出ようとすると董卓がアキラを呼び止めた。

アキラ
「はい？」

董卓
「私の真名（まな）は月です…」

アキラ
「えっ！？」

賈駆
「月！何で真名を…」

董卓の突然の行動に驚く賈駆。

董卓
「詠ちゃんもミノルさんに真名を教えたら？」

賈駆
「な！何で私が！しかもミノル限定！？」

すると董卓が小声で賈駆に耳打ちした。

董卓
『知ってるよ詠ちゃんがミノルさんの事気になってる事』

賈駆
「／／／！！」

董卓の言葉に顔を赤らめる賈駆。

アキラ
『なるほど…あの子兄さんの事…』

するとミノルが賈駆の前にやって来て、彼女の頭を撫でた。

ミノル
「かならず帰ってくる、約束する！」

賈駆
「・・・・・・うん…あと…これ！」

ミノル
「???」

彼女が持っていたのは赤色と白色のお守りだった。

ミノル
「これは?」

賈駆
「月と一緒に作った手作りのお守りよ…白がアキラので、赤があんたのよ!」

見るからに赤色のお守りが白のお守りよりちょっと雑な出来だった。

ミノル
「ありがたく貰うよ」

アキラ
「ありがとうございます」

二人はお守りを首にかけた。

アキラ
「行ってくるね月ちゃん」

月
「はい!」

ミノル
「行って帰ってくるよ、詠」

詠
「気をつけて…」
ミノルとアキラは部屋を出た。

おまけ

シーナ
「あなた…」

コーウェイ
「ん？」

シーナ
「後でお赤飯炊きましょう」

コーウェイ
「そうだな…」

二人の将来が楽しみなシーナとコーウェイだった。

第六章　介入　～準備～（後書き）

虎牢関の前に立つミノルとアキラ、

打倒董卓の連合軍が二人の正体を知った時、それぞれの部隊の反応は？

連合軍の答えに彼らは決断した。

次回　『介入　～真意～』お楽しみに～

第七章　介入　～真意～（前書き）

完成しました…

いや～連チャンは辛い…

けどバリバリ行くぞ！

ではどうぞ！

第七章　介入　～真意～

～虎牢関・連合軍ｓｉｄｅ～

袁紹
「おーっほっほっほ！　全速前進ですわ！」

此処は難攻不落の虎牢関。
その門の前には総大将、袁紹が率いる連合軍の姿があった。
そして現在、連合軍は会議を行っている。

曹操
「待ちなさいオバさん」

袁紹
「何ですかチビッ子？」

曹操
「今攻めたって軍は疲れきっているわ。此処は一旦整えてから攻めるべきよ金髪クルクルパー」

袁紹
「甘いですわね。今攻めなければ向こうも回復してしまいますわこの同性愛の性欲変態幼女」

互いの悪口を入れながら意見を言う二人。

劉備
「あ、あはは～……」

それを苦笑いをしながら見守っている劉備。

孫策
「やれやれ…」

目を瞑り、ため息をつく孫策。

???
「またか……」

溜め息をつき、どうすればいいか考える公孫賛。

???
「七乃や、妾は飽きたぞよ」
???
「我慢してくださいお嬢様♪」

もはや会議にも参加していない袁術と張勲。

？？？

「……はぁ～」

曹操の様子に溜め息をつく一刀。

主にこの面子で会議が行われていたが、以上の通り、会議になっていなかった。

劉備

「と、とりあえず曹操さんの意見を聞きませんか？」

此処で劉備は曹操の意見に賛成する。

袁紹

「あら劉備さん、シ水関で猛将・華雄を撤退させてから少し生意気ではありません？」

劉備

「そ、そんな事はないですよ！」

袁紹

「……まぁ今回はチビっ子の意見を聞きましょう。わたくしは心が広いですからねぇ。おーっほっほっほ！」

曹操
「そう……なら私はもう行くわ。行くわよ一刀」

一刀
「え？　あ、ああ、わかった」

孫策
「終わったなら私も行かせて貰うわよ」

そう言うと同じ曹操と孫策は立ち上がり立ち去ろうとした。
その時……

？？？
「会議中失礼しますッ！！」

一人の伝令兵が慌てて入ってきた。

袁紹
「慌しいですね。何ですの？」

伝令兵
「こ、虎牢関より敵が現れました！！」

一同
「「「「！？」」」」

その一言によりその場は緊張に包まれた。

袁紹
「あらあら、だからわたくしの言うとおりにすればいいものを……それでは進軍致しますわ！　異論は認めませんわ！」

伝令兵
「で、ですが……」

袁紹
「あら貴方、何かありまして？」

伝令兵
「て、敵は……二人なんです」

袁紹
「……は？」

その言葉を聞いた瞬間、袁紹は間抜けな顔になっていた。

～虎牢関・門前～

ミノル
「結構な数だな～」

アキラ
「そうだね～」

一方の虎牢関の門前には一人の男が立っていた。

否、門前に“現れた”と言った方が合っているだろう。
連合軍が様々な準備を行っていた時、門の上から現れたのだ。
いきなりの男の登場に連合軍の兵士は動揺を隠しきれなかった。

アキラ
「はるばるこんな所に来て…」

ミノル
「何か用か？」

袁紹
「あなた方には関係ありませんわ！」

その男の問いに袁紹が答えた。

袁紹
「そもそも貴方は誰ですの！？　この名族、袁本初の前に現れたのですからそれ相応の覚悟は出来ているのでしょう？」

アキラ
「兄さん…袁家って知ってる？」

ミノル
「全然、まったく、聞いた事もないな」

袁紹
「な！何ですって！！」

二人の言葉にキレる袁紹。

ミノル
「それより…その名家のあんたがこの連合軍の大将か？」

袁紹
「ええ、いかにも」

アキラ
「そうですか…ならあなたに聞きたい、この連合軍を作った意味は何ですか？」

袁紹
「そんなの決まっていますわ！　洛陽を苦しめる暴君、董卓の討伐ですわ！」

暴君の言葉に少し怒りを覚える二人。

ミノル
「……なるほど、よ～くわかった…じゃあ今度は劉備軍、曹操軍、孫策軍に問う！」

ミノルは真剣な目で言い放った。

ミノル
「あんたらがこの戦に参加した理由は何だ？まずは…劉備！言ってみろ」

ミノルは大声で劉備に言った。

劉備
「えっ！え～っと、洛陽の民を苦しめている董卓を倒して民を助けるために来ました」

ミノル
「はいわかった…次は曹操！」

ミノルは曹操に向かって叫んだ。

曹操
「私も劉備と同じ意見で、自分の国の名を轟かせるためよ！」

ミノル
「次！孫策」

孫策
「私達は孫後の繁栄のために参加したわ…それだけ」

ミノル
「董卓討伐はついでか？」

孫策
「まあ…そうなるわね」

孫策の言葉にわかった様子のミノル。

袁紹
「話は終わりましたか？さぁ！早くおどきなさい」

ミノル

「悪いね…俺ら二人はあんたらが言う悪逆非道の董卓軍の将だから…」

アキラ
「ここを通す訳にはいかない！」

袁紹
「おーっほっほっほ！まさか二人だけでこの大軍を止めるおつもりで？」

袁紹は高笑いして二人を馬鹿にした。

だが二人は…笑っていた。

アキラ
「ええ…そのまさかです」

そう言って二人は剣を抜いた。

ミノル
「その高笑いを悲鳴に変えてやろうか？袁紹のクソババア！！」

ミノルが怒り混じりで袁紹に向かって言い放った。

袁紹
「何ですって！！皆さん、あの命知らずの二人をやっつけておしまい！」

「「「「ウオォォォォォオオ！！！」」」」

袁紹の号令により大軍が二人目掛け突貫した。

ミノル
「封炎…」

アキラ
「封雷…」

二人
「「解放！！」」

「「「「ギャアアアアアアアアアア！！！！」」」」

突貫した兵の半数以上が吹っ飛んだ。連合軍はそれには驚きを隠せなかった。

ミノル
「命知らず？」

アキラ
「その言葉、そっくり返しましょう」

炎の剣を持つミノルと雷の剣を持ったアキラが立っていた。

袁紹
「な…！何者ですの！？」

ミノル
「そう言えば自己紹介まだだったな…」

アキラ
「この際名乗りましょう」

ミノル
「俺が赤き戦人　ミノル！」

アキラ
「僕が白き戦人　アキラ！」

二人は剣を袁紹に向けた。

ミノル
「俺が…」

アキラ
「僕達が…」

二人
「「天の遺いだ！！」」

第七章　介入　～真意～（後書き）

ついに始まる戦い。

二人の正体に驚く連合軍

様々な思惑とは裏腹に、二人はもう一つの作戦を考えていた。

はたして、その作戦とは？

連合軍は二人を倒す事が出来るのか？

次回　『介入　～思惑～』

二人の作戦に、ある者は慌て、ある者は怒りを露にする。

ちょっとダブルオーの次回予告風にやりました…似てないか（笑）

お楽しみに～

第八章　介入　～思惑～（前書き）

二人の思惑とは？

そして二人の作戦とは？

それでは、開演です！

第八章　介入　～思惑～

劉備
「まさか…あの二人が…」

劉備は突然現れたミノルとアキラが赤き戦人と白き戦人で、天の遣いだとわかった途端、驚きを隠せない。

関羽
「よもや董卓軍の将で、敵となって出会うとは」

張飛
「兵士が吹っ飛んだのだ！」

趙雲
「いやしかし、本当に剣から炎と雷が出ている…」

馬超
「妖術の類かな？」

劉備たちは二人の存在に驚いていた。

曹操
「一刀、あなたと同じ天の遣いだそうよ…」

一刀
「いや…俺の世界にはあんな剣見たことがない」

同じ天の遣いである北郷一刀も驚いていた。ましては二人が魔界から来たとは知る由もない。

曹操
「つまり…あなたとは違う世界から来たという事になるわね」

一刀
「ああ…そうなるな…」

今はそれしか言えない二人であった。

孫策
「あの二人が噂の戦人で天の遣いか…」
孫策は劉備ほど驚いてはいなかった。むしろ冷静である。
周瑜
「雪蓮、感心している場合では…」
軍師である周瑜が孫策に注意した。
孫権
「姉様！」
孫策
「わかってるわ…一旦待機、様子を見ましょう」

一方、洛陽では

コーウェイ

「住民の避難、完了しました」

月

「ありがとうございます」

コーウェイは洛陽のいる民を避難させた。

詠

「大丈夫かな…あの二人」

シーナ

「大丈夫です…あのお二人はお強いですから」

シーナは笑顔で答えた。

シーナ

「董卓様、お荷物の準備を…」

月

「はい！」

シーナは笑顔で返した。

ミノル
「おうりやぁ！」

「「「「「ギャアアアアアア！！」」」」」

ミノルは突貫した残りの袁紹軍の兵士をなぎ倒している。

アキラ
「そこだ！」

「「「「「グアアアアアアア！！」」」」」

アキラも素早い動きで敵を倒している。

「「「くらえーーー！！！」」」

アキラの背後から兵士三人が襲ってくるが、

ミノル
「おら！」

「「「ぶは！！！」」」

ミノルがその三人を殴り飛ばした。

アキラ
「ありがとう！兄さん」

ミノル
「残りは逃げたか…」

二人の周りには倒れている兵士だらけだった。しかも…

兵士
「何だこれ！？気絶してる…死んでる奴なんか一人もいねえ」

兵士は膝をつきながら驚いていた。そう二人は兵士達を峰打ちで倒している。そのためか二人には血の一滴すら浴びていない。

ミノル
「あっ！まだいた…」

兵士
「ヒィ！」

ミノルがそう言うと兵士がびびった。

アキラ
「兄さん…戦闘の意志はないみたい」

ミノル
「じゃあさっさと帰りな」

兵士
「ウアアアアア…」

男は武器を捨て、去って行った。

ミノル
「袁紹がいる陣に行きたいけど…」

アキラ
「劉備軍、曹操軍、孫策軍の防衛網を突破しないと…」

そう袁紹がいるのはあの三つの軍を突破しなければならない。

ミノル
「合図を出すのはまだ早い、戦力はなるべく温存しないと…」

アキラ
「そうなると…最低一つの軍でも落とさないと…」

ミノル
「アキラ…こうなればアノ作戦やるぞ…」

アキラ
「わかった！」

果たしてその作戦とは？

一方その頃

劉備ｓｉｄｅ

劉備

「片付けちゃった」

関羽

「あの大軍を二人だけで…」

張飛

「凄いのだ！」

三人は二人の戦いぶりに驚き、感動していた。

趙雲

「愛紗、感動している場合か？」

関羽

「そうだな！翠、桃香様を頼む！」

馬超
「わかった！！」

張飛
「よし！行くのだ！」

劉備
「待ってみんな！」

突然、劉備が皆を止めた。

関羽
「桃香様、何故？」

劉備
「何かあの二人、何か言ってる…」

関羽・張飛・趙雲・翠
「「「「えっ！！！」」」」

曹操ｓｉｄｅ

曹操
「春蘭、秋蘭」

二人
「「はっ！」」

曹操
「「貴方達は季衣、流琉、凪、真桜、沙和を連れて…」

一刀
「待って華琳！」

曹操が言っている途中、一刀がそれを止めた。

夏候惇
「貴様！華琳さまがまだ…」

夏候淵
「姉者、ひとまず落ち着いたらどうだ？」

夏候惇
「しかし！」

曹操
「春蘭、お黙りなさい…」

夏候惇

「華琳さま…」

曹操は夏候惇を黙らせた。

曹操
「それで…一刀、何かしら？」

一刀
「あの二人…なんか言ってないか？」

曹操
「えっ？」

孫策ｓｉｄｅ

孫策
「冥琳！」

周瑜
「ええ…祭と思春、明命はいつでも…」

孫権
「私も行くわ！姉様」

周瑜
「蓮華様！」

孫策と同じ鮮やかなピンク色ののロングヘアーで褐色肌の少女、孫策の妹・孫権が剣を持って申し出た。

孫策
「いいわ…でも、無理はしないでね」

孫権
「はい…」

陸遜
「ですが此方の兵が少なくなるのが嫌ですね～」

孫策
「それでもいいわ…ん？」

周瑜
「どうした？雪蓮」

孫策
「何か…あの二人、話してる？」

二人はついに、三軍がいる近くににやって来た。

ミノル
「どうする？左に劉備軍、真ん中は曹操軍、右には孫策軍がいるのだが…どうするアキラ？」

何故かミノルは三軍に聞こえるように言っていた。

アキラ
「じゃあ僕は劉備軍中心に攻めるから…兄さん残り全部でどう？」

アキラも同様に同じ大きい声で言う。

ミノル
「ちょっと待て！？何で俺が曹操軍と孫策軍なんだよ！」

ミノルがアキラの言う事に反対し、指をさして言った。

そして…

ミノル
「シ水関の戦いで後方に下がった腰抜け曹操軍と孫策軍とやらなきゃいけないいんだよ!」

曹操軍、孫策軍
「「「「「「「「なっ!!!」」」」」」」」

ミノルは突然、曹操軍と孫策軍を馬鹿にしたのだ。突然な事に驚く両軍。

ミノル
「俺が劉備軍を攻めるから…アキラ、お前が行けよ」

アキラ
「僕だって逃げる事しか脳がない連中と戦いたくないよ…」

追い討ちをかけるようにアキラも言った。

ミノル
「わかった、二人で劉備軍を攻めるってのはどうだ？」

アキラ
「それじゃあ残った曹操軍と孫策軍は？」

ミノル
「んなもん無視だ無視！」

アキラ
「それじゃあ攻めてきたら？」

ミノル
「どうせ二、三発殴ったら倒れる連中だよ…体力の無駄使いだ」

アキラ
「そうだね…無駄使いになるね。そもそも…相手になるのかもわからないし…」

ミノル
「そうだな…じゃあその作戦で行くか！題して『劉備軍から攻めよう、残りは空気的な存在扱い大作戦！！』に決定！」

どこからかラッパの音が聞こえてきそうな雰囲気で言ったミノル。
しかも…

アキラ
「しかも兄さん知ってる？曹操軍って実は百合の集まりなんだって〜」

曹操軍
「「「「なっ！」」」」

ミノル
「マジで！じゃあいつも夜中には女性だけの…あんな事とかこんな事とかするのか！？

アキラ
「男とは無縁ですね…もしかしたら一生百合で貫くとか？」

ミノル
「気持ち悪！寒気がしてきた…」

曹操軍の怒りが上昇した。さらに…

ミノル
「じゃあ孫策軍は？」

アキラ
「褌してる女の子がいるって話だよ？」

孫策軍
「「「「なっ！」」」」

ミノル
「えっと…褌って、女の下着だっけ？」

アキラ
「いや…男が身につけるものですよね？」

ミノル
「だよな！もしかして見せ下着じゃねえのか？ほら！わざと男に見せ付けるってやつ」

アキラ
「あ～あれですね…しかも褌…」

ミノル
「じゃあ何か？孫策軍の人達って、褌をいつも常備してんの？決まってんの？その決まりあるの？わざと見せてるのか？女のチラッと見える秘部を…」

アキラ
「兄さん…これ以上言ったら…孫策軍の皆、恥かいちゃうよ？」

ミノル
「そうだな！」

二人
「「あーはははは…」」

孫策軍の怒りが増していった。

そして、二人の笑いが響き渡った。

劉備
「凄い暴言」

関羽
「何とも言えません…」

張飛
「ねぇ？百合って何なのだ？」

趙雲
「ううむ…怖いもの知らずとはこのことか…」

翠
「あはは…（汗）」

あまりの行動に驚く劉備軍だった。

夏候惇

「あの二人…許さん！華琳様！！」

曹操

「春蘭、秋蘭！貴方達は季衣、流琉、凪、真桜、沙和を連れてあの二人に私たちの力を見せ付けなさい！」

二人

「「御意！！」」

二人は怒りのオーラを出しながら行った。もちろん曹操も怒りのオーラを出していた。

一刀

「こ…怖い…」

その隣で震える一刀だった。

孫策
「無茶苦茶な言われようね…周瑜、もう出陣させた」

周瑜
「もうとっくにやっている！」

孫策
「蓮華も…」

周瑜
「怒りの形相で向かった」

孫策
「そう…『何か…誘われてる感じがするのは、気のせいかしら』」

孫策は心中そう思った。

アキラ
「動いたね…」

ミノル
「ああ…作戦どうりだ」

アキラ
「いいの…これで？兄さんが挑発した両軍相手にするなんて…」

ミノル
「別に構わないよ」

そう言って二人は後ろを向いて虎牢関を見た。

ミノル
「じゃあ…行くぜ！」

アキラ
「はい！」

そう言ってアキラは劉備軍に、ミノルは真っ直ぐ向かって行った。

第八章　介入　～思惑～（後書き）

劉備軍対アキラ、曹操、孫策軍対ミノルの戦いが始まった。

劉備軍と戦うアキラ、劉備の願いと理想を聞いたアキラの反応は…

次回　『介入　～理想～』

それは、願いと野望と同等のものである。

お楽しみに～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0371x/

真・恋姫†無双 英傑達と二人の魔王

2011年10月13日02時50分発行